

# \**Pāramitāyānabhāvanākramopadeśa*

## 校訂テキスト及び試訳（1）

佐藤 晃

### 1. はじめに

後期中観派を代表する論師の一人であるカマラシーラ（Kamalaśīla, ca. 740–795）は、三篇の *Bhāvanākrama*（BhKr, 『修習次第』）等において修行論を整理している。彼は当時のチベット王チソンデツェン（Khri srong lde btsan, 742–797）の招きにより、師シャーンタラクシタ（Śāntarakṣita, ca. 725–788）の後を追う形でチベットに入る<sup>(1)</sup>。上記の BhKr はその王の要請により著され、献上されたものとされる<sup>(2)</sup>。その内容は修行により証得されるべき一切法無自性性（sarvadharmāṇiḥsvabhāvatā）という真実たる事柄の内容、またその修行の体系（大悲（mahākaruṇā）の生起、菩提心（bodhicitta）の生起、方便（upāya）と智慧（prajñā）、聞思修の三慧、止観双運道（śamathavipaśyanāyuganaddhavāhī mārgaḥ）、煩惱論等）の解説となる<sup>(3)</sup>。BhKr は、仏教がチベットの地に本格的に根付き始めた時代に王に献上された論書である。そのような背景もあっても、それは平易な文体で簡潔にまとめられた仏教の入門書的な雰囲気を持つ。しかしながら BhKr-I は、シャーンタラクシタ、カマラシーラ師弟が後期中観派の中で特に瑜伽行中観派に配される所以とも言える、インド大乘仏教において中観派と勢力を二分した瑜伽行唯識派の教理を吸収し、その上で中観派を最上位とする或る種の教相判釈を *Lankāvatāra-sūtra* X. 256–258 の偈を引用しつつ提示しており、この点において重視

されるべき論書の一つである<sup>(4)</sup>。そして、既に多くの先行研究により指摘されるように、カマラシーラが BhKr 等において整理した修行論は、後代諸師の論書で引用され、また援用される。そこで本稿では、カマラシーラの議論の影響の下に著されたことが明白な論書の一つである<sup>(5)</sup>、9 世紀頃に活躍したと想定されるジュニャーナキールティ (\*Jñānakīrti, Ye shes grags pa)<sup>(6)</sup> の \*Pāramitāyānabhāvanākramopadeśa (PYBhKrU, 『波羅蜜乘修習次第説示』) を取り上げ、その一部について校訂テキスト及び試訳を提示する<sup>(7)</sup>。後期大乘仏教、特にカマラシーラ以降の修行論の変遷を検討する上での一資料の提供になればと考える。

## 2. PYBhKrU 概説

本稿において校訂テキスト及び試訳を提示するジュニャーナキールティ著 PYBhKrU は一般によく知られた論書ではない。本書の基本情報は以下の通りである。本書のサンスクリット原典は現在確認されておらず、チベット語訳のみが使用可能である。奥書によると、翻訳者はインド人学僧であるパドマーカラヴァルマン (\*Padmākaravarman) とチベット仏教後伝期の大翻訳官として活躍したリンチェン・サンポ (Rin chen bZang po, 958–1055) である。このことから、本書が訳出されたのは、チベット仏教後伝期の 10 世紀後半から 11 世紀前半となる。なお、本書に関して言及する先行研究はわずかである<sup>(8)</sup>。

では、PYBhKrU は何を記した論書であるのか、つまり、本書の著述意図はどこにあるのか。このことはそのタイトルから以下のように考えることができる。まずタイトルの「波羅蜜乘」(pha rol tu phyin pa'i theg pa, \*pāramitāyāna) という語は、「真言乘」(mantrayāna) という語の対となる密教用語である。磯田[1979]によると、ジュニャーナキールティは

主著\**Tattvāvatārākhyasakarasugatavācasamkṣiptavyākhyāprakaraṇa*<sup>(9)</sup> (TAĀ, 翻訳者は PYBhKrU と同じ二人である)において、修行者を真言乗、波羅蜜乗、そして離貪欲を求める者の三段階に分類し、さらにそれぞれを上根・中根・下根に分ける。つまり、計九段階の修行者を想定する。その上で各段階の修行道を示しているという。そして、本稿で取り上げる PYBhKrU の記述が TAĀ で示される波羅蜜乗の上根者に関する記述に対応する点が指摘される<sup>(10)</sup>。次に「修習次第」(bsgom pa'i rim pa, \*bhāvanākrama) という語があることから、本書は修行者が何のために何を如何なる手順で修習すべきかを整理したものであることが分かる。以上のことから、本書は、波羅蜜乗の上根の段階にある修行者が実際の修行において何を目指し何を如何なる手順で修習すべきか、その体系を整理することを意図した論書であると言える。なお磯田[1975]は、PYBhKrU が上述の TAĀ からの抜粋である可能性を指摘する。両者を比較した場合、PYBhKrU とそれに対応する TAĀ は、殆ど文言に違いが無い。しかし、下記 PYBhKrU のシノプシス中「§3.1.2. 観」については、対応する TAĀ の議論の方が明らかに内容的に充実している。磯田[1975]が指摘する PYBhKrU が TAĀ からの抜粋である可能性は否定し得ないが、確定的なことは言えないものの、PYBhKrU 固有の著述意図があることは窺えよう。なお、ジュニャーナキールティの名前及び PYBhKrU という論書名は、ディーパンカラシュリージュニャーナ (Dīpamkaraśrījñāna, 982–1054) の *Bodhimārgadīpapañjikā* (BMDP)<sup>(11)</sup> やツォンカパ・ロサンタクパ (Tsong kha pa bLo bzang grags pa, 1357–1419) の *Lam rim chung ba*等に確認され、この点は注目に値する<sup>(12)</sup>。

以下、本稿で扱う PYBhKrU 本文に従いその修行体系の概観を試みることにするが、それに先立ち PYBhKrU の全体の見通しを付けるために

暫定的ではあるがそのシノプシスを以下に提示しておく。なおここでは便宜上 D<sup>1</sup>（デルゲ版 No. 3922）の箇所情報のみを提示する。

【\*Pāramitāyānabhāvanākramopadeśa シノプシス】

（※シノプシスの中で二重下線を付した箇所が本稿で扱う箇所となる。）

<u>§1. 序</u>	D <sup>1</sup> 72b4
<u>§2. 菩提心</u>	D <sup>1</sup> 73a5
<u>§2.1. 菩提心の分類</u>	D <sup>1</sup> 73a5
<u>§2.1.1. 誓願心と発趣心</u>	D <sup>1</sup> 73a5
<u>§2.1.2. 三種類の誓願心と十九種類の発趣心</u>	D <sup>1</sup> 73a7
§2.1.2.1. 三種類の誓願心	D <sup>1</sup> 73b1
§2.1.2.2. 十九種類の発趣心	D <sup>1</sup> 73b4
§2.2. 各菩提心と修行階梯	D <sup>1</sup> 73b5
§2.3. 誓願心と発趣心の定義	D <sup>1</sup> 73b7
§3. 実践	D <sup>1</sup> 74a2
§3.1. 智慧——止観双運道——	D <sup>1</sup> 74a3
§3.1.1. 止	D <sup>1</sup> 74a3
§3.1.1.1. 止の資糧	D <sup>1</sup> 74a4
§3.1.1.2. 止の対象	D <sup>1</sup> 74a5
§3.1.1.3. 止の過程	D <sup>1</sup> 74a6
§3.1.1.3.1. 貪欲を鎮める——九想観——	D <sup>1</sup> 74b1
§3.1.1.3.2. 瞋恚を鎮める——慈悲観——	D <sup>1</sup> 74b5
§3.1.1.3.3. 愚癡を鎮める——縁起観——	D <sup>1</sup> 74b5
§3.1.1.3.4. 対象に対する不満足を鎮める	D <sup>1</sup> 74b6

§3.1.1.3.5. 昏沈と掉挙を鎮める	D <sup>1</sup>	74b6
§3.1.1.3.6. 六過失と八斷行	D <sup>1</sup>	75a2
§3.1.1.3.7 九種心住	D <sup>1</sup>	75b1
§3.1.1.4. 止の完成	D <sup>1</sup>	76b6
§3.1.2. 觀	D <sup>1</sup>	75b7
§3.1.3. 止觀双運道の果報	D <sup>1</sup>	76a4
§3.1.3.1. 斷惑	D <sup>1</sup>	76a4
§3.1.3.2. 智慧の完成——智慧波羅蜜——	D <sup>1</sup>	76a7
§3.2. 方便と智慧の併修	D <sup>1</sup>	76b3
§3.2.1. 方便の定義	D <sup>1</sup>	76b5
§3.2.2. 智慧の定義	D <sup>1</sup>	76b5
§3.2.3. 方便と智慧の併修	D <sup>1</sup>	77a1
§3.2.4. 方便と智慧の併修による果報	D <sup>1</sup>	77a5
§4. 奥書	D <sup>1</sup>	77b2

本稿では、紙幅の都合上、上記シノプシスの「§1. 序」から「§2.1.2. 三種類の誓願心と十九種類の発趣心」までの箇所のみを扱うに留めた。しかしながら、その「§1. 序」では、本書全体で示される修行体系が簡略ながら端的に提示されていると言える。そこで、以下本稿では扱い得なかった箇所をも適宜参照しつつ<sup>(13)</sup>、その概説を行う。

「§1. 序」は二つの偈及びそれに対する注釈で構成される。ここでは、修行の枠組みとその修行により得られる果報とが示される。偈からは、「智慧と止の修習」という修行の枠組みと、それを原因とする果報として「福德資糧及び知資糧の完成」、「大悲心の生起」、さらに「完全なる菩提」が示される。また、私は「智慧と止の修習」の次第をそれらに専

念できない者達に対して説示された、と述べて、本書でその「智慧と止の修習」を論じることの意義付けを行っている。このように本書は「智慧と止」を中心とする修行体系の解説を目的とする論書であると言える。

しかしこの偈に対する注釈部分に進むと、上記のごとき修行に専念できない者達に対して仏が説示された修行の内容とは「止観双運道」であるとされる。すなわち、修行者は、心を或る特定の対象に留め置くこと（「止」、心一境性）と、その対象を智慧によって洞察すること（「観」とを併せ修めるべきであるというのである。本書では特に止に関する解説が充実しており、それが本書の一つの特徴となっていると言えよう（§3.1.1.以下）。一方、観に関する解説は止のそれに比して少ない。既に指摘した通り、ジュニャーナキールティは本書に比して、主著 TĀĀ においてこの観に関するより充実した解説を行っている。偈の中において「智慧と止の修習」として提示された修行内容とは、具体的にはこの「止・観（＝智慧）双運道」を指している。そして、この止を伴った観すなわち智慧の修習が完成すると、修行者において「智慧の直証」があるとされる（【止観双運道⇒智慧の直証】）。

しかし、この智慧の直証のみによって、先の果報が得られるわけではない。修行者は、さらに、この「智慧を自性とする方便」、すなわち、智慧によってその無顛倒性が決定される方便の学修が必要とされる（§3.2.2）<sup>(14)</sup>。ところで、智慧によって方便の無顛倒性が決定されることは如何なることか。本書においては、方便の具体的内容として、布施をはじめ、さらに四無量心、四摂事が挙げられる。これら諸方便は、智慧が無ければその無顛倒性は保証されないというのである。このことは次のような喩例を以て説明される。すなわち、或る人が何かの拍子に毒薬を服してしまったとする。通常であれば、その人はその毒薬に侵されてしまうであろう。しかし、その毒薬がマントラを掛けられ毒抜きされた

ものであれば、彼はその毒薬に侵されずに済む。ここで毒薬に例えられるものが、まさに先の諸方便である。一方、マントラに例えられるものは、智慧に他ならない。ここで重要な点は、一般に善行とされる諸方便の実践も、時に修行者をして煩惱に汚された者としてしまう恐れがあると考えられている点である。例えば、布施の実践とは、財を求められれば財を施し、法を求められれば法を授けると言った内容となる。しかし、我々自身の経験からも理解されるように、布施を行う者が、彼自身（能施）、布施の対象となる相手（所施）、また、その相手に施すもの（財や法）（施物）に対する執着を離れることは容易なことではない。しかるに、布施を行う上で、その布施が上記三者に対する執着を離れたもの（＝三輪清浄なる布施）でなければ、布施を行う修行者は執着に侵され続ける者となろう。では自身及び他者のために如実に布施を実践するには何が必要となるのか。それこそが智慧の完成である。智慧の完成を得た修行者は、それによって正しい布施、すなわち、あらゆる執着を離れた無顛倒なる布施を識別し、まさに如実に自身と他者のために布施を実践することができるのである（§3.2.2.）<sup>(15)</sup>。修行者は止を伴った智慧の修習（＝止観双運道）の過程においてあらゆる執着を取り除き、一切法無自性性を知悉する、つまり、智慧の完成を得るとされる（§3.1.3.2.）<sup>(16)</sup>。このようにしてあらゆる執着が取り除かれ智慧が完成すればこそ、布施等の諸方便の無顛倒性は保証され、その実践が実現し得る（＝方便の完成）のである。そして、ここにおいて修行者の智慧と方便は共に完成し、先述の諸果報の成就、さらに「仏性の成就」に到達するのである。

「§1. 序」において、本書が「智慧と止の修習」すなわち「止観双運道の修習」の解説の必要性を強調するのは、それこそが「智慧の直証」つまり智慧の完成にとっての直接的な原因であるからに他ならない。

### 3. \**Pāramitāyānabhāvanākramopadeśa* 校訂テキスト及び試訳

#### 【凡例】

使用テキスト：今回テキスト校訂を行うに当たって使用したテキストは、以下に挙げるチベット語訳諸版である。

C チョーネ版, dBu ma, ki, 74a3–79a5.

D<sup>1</sup> デルゲ版, No. 3922, dBu ma, ki, 72b5–77b3.

D<sup>2</sup> デルゲ版, No. 4542, Jo bo'i chos chung, 165b4–170b3.

※なお D<sup>2</sup> に関しては『西蔵大蔵経 [マイクロフィッシュ版]』（仙台：東北大学附属図書館, 1978）を使用した。

G<sup>1</sup> 金写版, No. 3316, a, 110b6–118b4.

G<sup>2</sup> 金写版, No. 3455, gi, 236b5–244a4.

N<sup>1</sup> ナルタン版, a, 78b4–84b2.

N<sup>2</sup> ナルタン版, gi, 186b1–192a6.

P<sup>1</sup> 北京版, No. 5317, dBu ma, a, 78b6–84a7.

P<sup>2</sup> 北京版, No. 5456, dBu ma, gi, 195a8–201a7.

校訂テキスト及び試訳の提示方法：校訂テキスト及び試訳を提示する際、

①テキストの箇所情報（前項に列挙した諸版の順で提示する）、②校訂テキスト、③<note>欄（※異読があった場合にのみ、次項に記した方法で提示する）、④試訳、の順で提示する。

例) ①… (C 74a3f.; D<sup>1</sup> 72b4f.; D<sup>2</sup> 165b4f.; ……)

②… (\*<sup>1</sup>pha rol tu phyin pa'i theg pa'i bsgom pa'i . . .

③… <note> (\*<sup>1</sup>…\*<sup>1</sup>)(pha . . . bzhugs) so (/) om. C,D<sup>1</sup>; . . .

④… 『波羅蜜乗修習次第……



**異読の注記**：異読があった場合は、校訂テキストの直下に<note>欄を設け、そこに以下の方法に基づき注記する。

①異読の有る語の右に「\*n」付して、注記する。

例) 本文：rgyud<sup>\*8</sup> / <note>：<sup>\*8</sup>brgyud G<sup>1</sup>,N<sup>1</sup>,P<sup>1</sup>.

…校訂では C,D<sup>1</sup>,D<sup>2</sup>,G<sup>2</sup>,N<sup>2</sup>,P<sup>2</sup> の"rgyud"を採用。それに対して、G<sup>1</sup>,N<sup>1</sup>,P<sup>1</sup> には"brgyud"と記されていることを示す。

②異読が複数音節に亘る場合は、「(\*n \_\_\_ \*n)」というようにその前後に記号を付す。

例) 本文：(\*<sup>17</sup> rang bzhin \*<sup>17</sup>) / <note>：(\*<sup>17</sup>…\*<sup>17</sup>)rang bzhin can D<sup>2</sup>,N<sup>2</sup>,P<sup>2</sup>.

…校訂では C,D<sup>1</sup>,G<sup>1</sup>,G<sup>2</sup>,N<sup>1</sup>,P<sup>1</sup> の"rang bzhin"を採用。それに対して、D<sup>2</sup>,N<sup>2</sup>,P<sup>2</sup> には"rang bzhin can"と記されていることを示す。

③異読が複数ある場合は、「異読 "A"; 異読 "B"」というように、「;」を用いて併記する。

例) 本文：bsgom<sup>\*1</sup> / <note>：<sup>\*1</sup>bsgoms C,D<sup>1</sup>; sgom D<sup>2</sup>,G<sup>1</sup>,N<sup>1</sup>,P<sup>1</sup>.

…校訂では G<sup>2</sup>,N<sup>2</sup>,P<sup>2</sup> の"bsgom"を採用。それに対する異読として C,D<sup>1</sup> の"bsgoms" (異読 "A") と D<sup>2</sup>,G<sup>1</sup>,N<sup>1</sup>,P<sup>1</sup> の"sgom" (異読 "B") があることを示す。

④或る語が無い場合は、「"A" om. C」("A"という語がCに無い) と示す。

例) 本文：zhi<sup>\*13</sup> / <note>：<sup>\*13</sup>zhi om. N<sup>1</sup>.

…校訂では、C,D<sup>1</sup>,D<sup>2</sup>,G<sup>1</sup>,G<sup>2</sup>,N<sup>2</sup>,P<sup>1</sup>,P<sup>2</sup> の"zhi"を採用。それに対して N<sup>1</sup> に"zhi"という語が無いことを示す。

## 【校訂テキスト及び試訳】

### §1. 序

(C 74a3f.; D<sup>1</sup> 72b4f.; D<sup>2</sup> 165b4f.; G<sup>1</sup> 110b6–111a1; G<sup>2</sup> 236b5f.; N<sup>1</sup> 78b5; N<sup>2</sup> 186b1f.; P<sup>1</sup> 78b6f.; P<sup>2</sup> 195a8–195b1)

(\*<sup>1</sup>pha rol tu phyin pa'i theg pa'i bsgom pa'i rim pa'i man ngag bzhugs so /\*<sup>1</sup>)  
pha rol tu phyin pa'i theg pa'i bsgom\*<sup>2</sup> pa'i rim pa'i man ngag /\*<sup>3</sup> sangs rgyas  
dang byang chub sems dpa' thams cad la phyag 'tshal lo //

<note> (\*<sup>1</sup>...<sup>\*1</sup>)(pha . . . bzhugs) so (/) om. C,D<sup>1</sup>; pha . . . so / om. D<sup>2</sup>,G<sup>1</sup>,G<sup>2</sup>,N<sup>1</sup>,  
N<sup>2</sup>,P<sup>1</sup>. \*<sup>2</sup>sgom D<sup>2</sup>,G<sup>1</sup>,N<sup>1</sup>, P<sup>1</sup>. \*<sup>3</sup>/ om. C,D<sup>1</sup>,G<sup>1</sup>,N<sup>1</sup>,P<sup>1</sup>.

『波羅蜜乘修習次第説示』[と題する論書が以下に]著録される。[チベット語で]『波羅蜜乘修習次第説示』[と言う]。すべての仏及び菩薩に帰命し奉る。

(C 74a4f.; D<sup>1</sup> 72b5f.; D<sup>2</sup> 165b5f.; G<sup>1</sup> 111a1f.; G<sup>2</sup> 236b6–237a1; N<sup>1</sup> 78b5f.; N<sup>2</sup> 186b2f.; P<sup>1</sup> 78b7f.; P<sup>2</sup> 195b1–3)

gang zhig bsgom\*<sup>1</sup> stobs kyis yongs rdzogs // tshogs gnyis kyi\*<sup>2</sup> ni rgyur  
gyur pa //

sangs rgyas nyid la yang dag brten\*<sup>3</sup> // (\*<sup>4</sup>bsgom pa'i\*<sup>4</sup>) skal dang mi ldan  
pa // PYBhKrU v.1 //

de'i\*<sup>5</sup> phyir 'gro ba'i mgon po yis // shes rab zhi gnas (\*<sup>6</sup>bsgom pa\*<sup>6</sup>)  
gsungs // de ni (\*<sup>7</sup>brtse chen\*<sup>7</sup>) rdzogs byang chub // 'gro ba'i rgyud\*<sup>8</sup> la  
skyed byed yin // PYBhKrU v.2 //

<note> \*<sup>1</sup>bsgoms C,D<sup>1</sup>; sgom D<sup>2</sup>,G<sup>1</sup>,N<sup>1</sup>,P<sup>1</sup>. \*<sup>2</sup>kyis G<sup>2</sup>,N<sup>2</sup>,P<sup>2</sup>; kyi om. G<sup>1</sup>.  
\*<sup>3</sup>brtan C,D<sup>1</sup>; bsten D<sup>2</sup>. (\*<sup>4</sup> ... \*<sup>4</sup>)sgom pa'i D<sup>2</sup>,G<sup>1</sup>,N<sup>1</sup>; sgom ba'i P<sup>1</sup>. \*<sup>5</sup>de  
D<sup>2</sup>,G<sup>2</sup>,N<sup>2</sup>,P<sup>2</sup>. (\*<sup>6</sup>...<sup>\*6</sup>)bsgom par D<sup>2</sup>; sgom pa G<sup>1</sup>,N<sup>1</sup>. (\*<sup>7</sup>...<sup>\*7</sup>)rtse mo G<sup>1</sup>,N<sup>1</sup>,P<sup>1</sup>.

\*<sup>8</sup>brgyud G<sup>1</sup>, N<sup>1</sup>, P<sup>1</sup>.

或る者達 (gang zhig, \*ye) は、修習の力により (\*bhāvanābalena) 完成する<sup>(17)</sup> [福德資糧と知資糧の] 二資糧にとっての原因 (\*saṃbhāradvayahetum) であり、仏性 [の成就] の拠り所 (\*buddhatvāśrayam) [である智慧と止] を修習することが出来ないが (\*bhāvayitum abhavyāḥ), 彼 [ら] のために (de'i phyir, \*teṣāṃ kṛtaśas) 世間の保護者 [たる世尊] は智慧と止の修習 (\*prajñāsamathabhāvanām) を説かれたのである。それ (\*sā, 智慧と止の修習) は、大悲と完全なる菩提 (\*mahākaruṇāsambodhī) を、世間の人々の相續の上に生起させるのである。<sup>(18)</sup>

(C 74a5–74b1; D<sup>1</sup> 72b6–73a1; D<sup>2</sup> 165b6f.; G<sup>1</sup> 111a2–4; G<sup>2</sup> 237a1–5; N<sup>1</sup> 78b6–79a1; N<sup>2</sup> 186b3–5; P<sup>1</sup> 78b8–79a2; P<sup>2</sup> 195b3–5)

gang yang bsgom<sup>\*1</sup> pa'i stobs las nges par 'byung<sup>\*2</sup> ba'i bsod nams dang ye shes gnyis kyi rgyu /<sup>\*3</sup> kun tu bzang po<sup>\*4</sup> nyid la<sup>\*5</sup> rgyun<sup>(<sup>\*6</sup>mi 'chad<sup>\*6</sup>)</sup> par mngon par brtson pa'i rnal 'byor pas dus yun ring por<sup>\*7</sup> mi<sup>\*8</sup> thogs par<sup>(<sup>\*9</sup>rdzogs par<sup>\*9</sup>)</sup> mngon sum du byed la / de byed pa'i skal ba<sup>\*10</sup> med pa de rnams kyi phyir<sup>\*11</sup> thugs rje chen po dang ldan pa'i mgon pos<sup>\*12</sup> zhi<sup>\*13</sup> gnas dang lhag mthong zung du 'jug pa'i lam nye bar bstan pa<sup>\*14</sup> mdzad pa yin te / de<sup>\*15</sup> ltar na de bsgom<sup>\*16</sup> pas bcom ldan 'das yum shes rab mngon sum du byas nas / de'i<sup>(<sup>\*17</sup>rang bzhin<sup>\*17</sup>)</sup> gyi sbyin pa la sogs pa'i<sup>\*18</sup> (<sup>\*19</sup>bya ba'i<sup>\*19</sup>) dngos po'i thabs la bslab<sup>\*20</sup> pa las sangs rgyas nyid du mngon par 'grub par 'gyur ro<sup>\*21</sup> zhes dgongs pa yin no // de yang<sup>\*22</sup> snying rje chen po skyes nas<sup>\*23</sup> byang chub kyi sems bskyed<sup>\*24</sup> la / de nyid gong nas gong du rnam par rtog<sup>\*25</sup> pa spangs pa'i tshul gyis rnam par rtog pa<sup>(<sup>\*26</sup>spangs pas<sup>\*26</sup>)</sup> yongs su dag pa

bskyed par bya ba'i phyir sgom par byed <sup>(\*27 do // \*27)</sup>

<note> \*1bsgoms C,D<sup>1</sup>; sgom D<sup>2</sup>,G<sup>1</sup>,N<sup>1</sup>,P<sup>1</sup>. \*2byung G<sup>2</sup>. \*3/ om. D<sup>2</sup>,G<sup>2</sup>,N<sup>2</sup>,P<sup>2</sup>.  
\*4po de G<sup>2</sup>,N<sup>2</sup>,P<sup>2</sup>. \*5la / D<sup>2</sup>. (\*6 ... \*6)mi chad G<sup>1</sup>,N<sup>1</sup>,P<sup>1</sup>,P<sup>2</sup>; ma chad G<sup>2</sup>,N<sup>2</sup>. \*7po  
C,D<sup>1</sup>,G<sup>1</sup>,G<sup>2</sup>,N<sup>1</sup>,N<sup>2</sup>,P<sup>1</sup>,P<sup>2</sup>. \*8ma G<sup>2</sup>,N<sup>2</sup>,P<sup>2</sup>. (\*9 ... \*9)rdzogs pa C,D<sup>1</sup>,G<sup>1</sup>,N<sup>1</sup>,P<sup>1</sup>; rdzod  
par G<sup>2</sup>,N<sup>2</sup>,P<sup>2</sup>. \*10pa D<sup>2</sup>,G<sup>1</sup>,G<sup>2</sup>,N<sup>1</sup>,N<sup>2</sup>,P<sup>1</sup>,P<sup>2</sup>. \*11phyir / G<sup>1</sup>,N<sup>1</sup>,N<sup>2</sup>,P<sup>1</sup>. \*12pos /  
G<sup>2</sup>,N<sup>2</sup>, P<sup>2</sup>. \*13zhi om. N<sup>1</sup>. \*14par D<sup>2</sup>. \*15\*ji D<sup>2</sup>. \*16bsgoms  
C,D<sup>1</sup>,D<sup>2</sup>,G<sup>1</sup>,G<sup>2</sup>,N<sup>1</sup>,N<sup>2</sup>,P<sup>2</sup>. (\*17 ... \*17)rang bzhin can D<sup>2</sup>,N<sup>2</sup>,P<sup>2</sup>. \*18pa D<sup>2</sup>. (\*19 ...  
\*19)bya ba'i om. N<sup>2</sup>,P<sup>2</sup>. \*20bslabs C,D<sup>1</sup>,D<sup>2</sup>,N<sup>2</sup>,P<sup>2</sup>. \*21ro / G<sup>1</sup>,P<sup>1</sup>; ro // N<sup>1</sup>. \*22nga  
D<sup>2</sup>. \*23pas D<sup>2</sup>, G<sup>2</sup>,N<sup>2</sup>,P<sup>2</sup>. \*24skyed G<sup>1</sup>,G<sup>2</sup>,N<sup>1</sup>,N<sup>2</sup>,P<sup>1</sup>,P<sup>2</sup>. \*25rtogs G<sup>2</sup>,P<sup>2</sup>. (\*26 ...  
\*26)spong bas G<sup>1</sup>,G<sup>2</sup>,N<sup>1</sup>,N<sup>2</sup>,P<sup>1</sup>,P<sup>2</sup>; spongs pas C,D<sup>1</sup>. (\*27 ... \*27)de / D<sup>2</sup>,G<sup>1</sup>,G<sup>2</sup>,N<sup>1</sup>,N<sup>2</sup>,  
P<sup>1</sup>.

修習の力から必ず生じる福德 [資糧] と知 [資糧] との二 [資糧] <sup>(19)</sup>の原因 (\*punyajñānasambhāradvaya hetum) [である智慧と止] を、まさに『普賢 [行願]』に対して不断に専心するヨーガ行者 (\*abhiyukto yogī) は<sup>(20)</sup>、長い時間を掛けずして (\*na cireṇa), 直証する (\*abhimukhīkaroti) <sup>(21)</sup>。しかし、或る者達は (gang yang, \*ye ca) それ (智慧と止の修習) を実践することが出来ない (\*tat karutum abhavyāḥ) が、彼らのために (de rnam kyī phyir, \*teṣāṃ kṛtāsas) 大悲を伴った (\*mahākārunikāḥ) 保護者 [たる仏] は (\*nāthaḥ) 止観双運道 (\*śamathavipaśyanāyuganaddhavāhinam mārgam) を説示されたのである (\*upadiśyate)。そのようにそれ (止観双運道) を修習する者 (\*bhāvayan) は仏母たる智慧を直証し (\*abhimukhīkurvan), [さらに] それ (智慧) を自性とする (\*tatsvabhāvam) 布施等の実践をあり方とする方便 (\*upāyam) を学修して<sup>(22)</sup>、仏性を成就するであろう、と意趣されるのである。また、それ (止観双運道) は (de yang, \*sa ca), 大悲を起こし、菩提心を生起する。

そして、次々と分別を断ずるという方法で<sup>(23)</sup>分別を断じることによって清浄なる〔菩提心〕<sup>(24)</sup>を生起させるために、まさにそれ（止観双運道）は（de nyid, \*sa eva）修習されるべきである（\*bhāvayitavyah）。<sup>(25)</sup>

(C 74b1-3; D<sup>1</sup> 73a2-5; D<sup>2</sup> 166a2-4; G<sup>1</sup> 111a6-111b3; G<sup>2</sup> 237a5-237b2; N<sup>1</sup> 79a3-6; N<sup>2</sup> 186b7-187a3; P<sup>1</sup> 79a4-7; P<sup>2</sup> 195b7-196a2)

snying rje chen po dang ldan <sup>(\*1 pa ni<sup>\*1</sup>)</sup> gzhan gyi<sup>\*2</sup> sdug bsngal gyis<sup>\*3</sup> sdug bsngal ba nyid kyis 'di dag thams cad nyid<sup>\*4</sup> sdug bsngal rnam las <sup>(\*\*5 bton la /<sup>\*5</sup>)</sup> sangs rgyas nyid la nges par sbyar <sup>(\*\*6 bar bya'o<sup>\*6</sup>)</sup> zhes byang chub kyi sems skyed<sup>\*7</sup> par byed <sup>(\*\*8 cing /<sup>\*8</sup>)</sup> 'di rnam kyang dam bcas pa'i gnyis su med pa'i ye shes kyi ngo bo dang /<sup>\*9</sup> sbyin pa la sogs pa'i<sup>\*10</sup> bya ba'i dngos po'i thabs la bslab<sup>\*11</sup> pa med par de gong nas gong du yongs su dag pa <sup>(\*\*12 med par rdzogs par mi 'gyur ro<sup>\*12</sup>)</sup> snyam du dgongs nas /<sup>\*13</sup> gnyis su med pa'i ye shes rdzogs<sup>\*14</sup> par bya ba'i phyir zhi gnas dang lhag mthong zung du 'jug pa'i lam yang sgom<sup>\*15</sup> par mdzad do zhes bya ba ni mdor bsdus te<sup>\*16</sup> bstan pa yin no //

<note> <sup>(\*\*1...\*1)</sup>pa ni / D<sup>2</sup>; pas ni C,D<sup>1</sup>. <sup>\*\*2</sup>gyi om. D<sup>2</sup>. <sup>\*\*3</sup>gyi G<sup>1</sup>,N<sup>1</sup>,P<sup>1</sup>. <sup>\*\*4</sup>nyid / N<sup>2</sup>,P<sup>2</sup>. <sup>(\*\*5...\*5)</sup>bton la D<sup>2</sup>,N<sup>2</sup>,P<sup>2</sup>; ston pa G<sup>1</sup>,N<sup>1</sup>,P<sup>1</sup>. <sup>(\*\*6...\*6)</sup>bar bya'o // D<sup>2</sup>; ba bya'o // G<sup>1</sup>,N<sup>1</sup>,P<sup>1</sup>. <sup>\*\*7</sup>bskyed G<sup>2</sup>,N<sup>2</sup>,P<sup>2</sup>. <sup>(\*\*8...\*8)</sup>/ om. C,D<sup>1</sup>,D<sup>2</sup>; kyang ci G<sup>1</sup>,N<sup>1</sup>,P<sup>1</sup>. <sup>\*\*9</sup>/ om. N<sup>1</sup>. <sup>\*\*10</sup>pa D<sup>2</sup>,G<sup>2</sup>,N<sup>2</sup>,P<sup>2</sup>. <sup>\*\*11</sup>bslabs G<sup>2</sup>,N<sup>2</sup>,P<sup>2</sup>. <sup>(\*\*12...\*12)</sup>mi rdzogs par 'gyur ro D<sup>2</sup>; med par mi 'gyur ro G<sup>2</sup>,N<sup>2</sup>,P<sup>2</sup>. <sup>\*\*13</sup>/ om. D<sup>2</sup>. <sup>\*\*14</sup>rdzog P<sup>2</sup>. <sup>\*\*15</sup>bsgom G<sup>1</sup>,G<sup>2</sup>,N<sup>1</sup>,N<sup>2</sup>,P<sup>2</sup>. <sup>\*\*16</sup>te de ni G<sup>1</sup>,N<sup>1</sup>,P<sup>1</sup>.

大悲を伴った〔保護者たる仏〕（\*mahākāraṇikāḥ）は、他者の苦しみ〔を観察すること〕によって〔自身も〕まさに苦しみを持つ者となることにより<sup>(26)</sup>、これらまさに全ての〔他者〕を諸々の苦しみから逃れさせるために、〔彼らに〕「仏性に至らん」という菩提心を生起させ、そして、

「[救済]を誓われた(\*pratijñāta)彼等<sup>(27)</sup>の、不二智(=智慧)を自性とし、そして布施等の実践を本性とする方便を学修することが無いならば、それ(菩提心)が益々清浄となることは無く、完全なものとはならないであろう」と密意して、不二智(=智慧)を完成させるために止観双運道をも修習すべきである、と要略して説示されたのである。<sup>(28)</sup>

## §2. 菩提心

### §2.1. 菩提心の分類

(C 74b3f.; D<sup>1</sup> 73a5; D<sup>2</sup> 166a4f.; G<sup>1</sup> 111b3f.; G<sup>2</sup> 237b2f.; N<sup>1</sup> 79a6f.; N<sup>2</sup> 187a3f.; P<sup>1</sup> 79a7f.; P<sup>2</sup> 196a2f.)

byang chub kyi sems de yang<sup>\*1</sup> rnam pa du zhig ce na / smras pa /

byang chub sems gang gzhan don du // yang dag byang chub 'dod pa yin  
//

de ni dbye ba gnyis kyi<sup>\*2</sup> gnyis // de dag<sup>\*3</sup> nyi shu gnyis su'ang<sup>\*4</sup> 'gyur //  
PYBhKrU v.3 //

<note> <sup>\*1</sup>ang D<sup>2</sup>. <sup>\*2</sup>kyi G<sup>1</sup>,N<sup>1</sup>,P<sup>1</sup>. <sup>\*3</sup>nyid G<sup>1</sup>,N<sup>1</sup>,P<sup>1</sup>. <sup>\*4</sup>su G<sup>1</sup>,N<sup>1</sup>,P<sup>1</sup>; su yang N<sup>2</sup>.

また、その菩提心とは何種類かと問うならば、答える。

他者を利益するために正しい等覚を求めることである菩提心は<sup>(29)</sup>、

[誓願心と発趣心との]二種類の区別に基づき二[種類]である。

そして、それら両者(誓願心と発趣心)は[さらに]二十二[種類]となろう。<sup>(30)</sup>

#### §2.1.1. 誓願心と発趣心

(C 74b4f.; D<sup>1</sup> 73a5-7; D<sup>2</sup> 166a5-7; G<sup>1</sup> 111b4-6; G<sup>2</sup> 237b3-5; N<sup>1</sup> 79a7-79b1; N<sup>2</sup> 187a4f.; P<sup>1</sup> 79a8-79b2; P<sup>2</sup> 196a3f.)

byang chub kyi<sup>\*1</sup> sems ni smon pa'i sems dang<sup>\*2</sup> 'jug pa'i sems so // de yang<sup>\*3</sup>  
sdong po bkod pa las /

rigs kyi bu sems can gyi tshogs na<sup>\*4</sup> gang bla na med pa yang dag par  
rdzogs pa'i byang chub kyi sems<sup>\*5</sup> rnyed par (<sup>\*6</sup>dka'o<sup>\*6</sup>) //

de bas kyang<sup>\*7</sup> sems can gang<sup>\*8</sup> bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i  
byang chub la mngon par zhugs pa de ni ches rnyed<sup>\*9</sup> par dka'o

zhes gsungs pa yin no //

<note> <sup>\*1</sup>kyi om. G<sup>1</sup>,N<sup>1</sup>,P<sup>1</sup>. <sup>\*2</sup>dang / N<sup>2</sup>,P<sup>2</sup>; dang // G<sup>2</sup>. <sup>\*3</sup>'ang D<sup>2</sup>. <sup>\*4</sup>ni  
C,D<sup>1</sup>,G<sup>1</sup>,N<sup>1</sup>,P<sup>1</sup>. <sup>\*5</sup>sems ni D<sup>2</sup>. (<sup>\*6</sup> . . . <sup>\*6</sup>)dka' ba'o C,D<sup>1</sup>,D<sup>2</sup>,G<sup>1</sup>,N<sup>1</sup>,P<sup>1</sup>. <sup>\*7</sup>na  
G<sup>1</sup>,N<sup>1</sup>,P<sup>1</sup>. <sup>\*8</sup>gang om. C,D<sup>1</sup>,G<sup>1</sup>,N<sup>1</sup>,P<sup>1</sup>. <sup>\*9</sup>rnyes P<sup>2</sup>.

菩提心とは、誓願心（\*prañidhicitta）と発趣心（\*prasthānacitta）とである<sup>(31)</sup>。そのことは、また『華嚴 [経]「入法界品」』（\*Gaṇḍavyūha）<sup>(32)</sup>に

良家の子よ、有情の集まりの中で、およそ無上なる正しい等覚 [に  
対して誓願の] 心を [有する者、そのような有情は] 得難いのである。

彼（誓願の心を有する有情）よりも、無上なる正しい等覚に対して  
邁進する [有情]、そのような [有情] は一層得難いものである。

と説かれている。<sup>(33)</sup>

### §2.1.2. 三種類の誓願心と十九種類の発趣心

(C 74b5-7; D<sup>1</sup> 73a7-73b1; D<sup>2</sup> 166a7-166b1; G<sup>1</sup> 111b6-112a1; G<sup>2</sup> 237b5f.; N<sup>1</sup>79b1f.;  
N<sup>2</sup> 187a5f.; P<sup>1</sup> 79b2f.; P<sup>2</sup> 196a4-6)

gnyis po de dag kyang rnam pa nyi shu rtsa<sup>\*1</sup> gnyis su dbye bar<sup>\*2</sup> bya ste / de  
yang<sup>\*3</sup> 'phags pa byams pas /

de yang sa gser zla ba me<sup>\*4</sup> // gter dang rin chen 'byung gnas mtsho //  
 rdo rje ri sman bshes gnyen dang // yid bzhin nor bu<sup>\*5</sup> nyi ma glu<sup>\*6</sup> //  
 rgyal po mdzod dang lam po che // bzhon<sup>\*7</sup> pa bkod ma'i chu dang ni //  
 sgra snyan<sup>\*8</sup> chu bo sprin rnam kyis // rnam pa nyi shu rtsa gnyis so //<sup>\*9</sup>  
 zhes bshad pa yin no //

<note> <sup>\*1</sup>rtsa om. G<sup>2</sup>,N<sup>2</sup>,P<sup>2</sup>. <sup>\*2</sup>ba C,D<sup>1</sup>,G<sup>1</sup>,N<sup>1</sup>,P<sup>1</sup>. <sup>\*3</sup>'ang D<sup>2</sup>. <sup>\*4</sup>med G<sup>1</sup>,N<sup>1</sup>,N<sup>2</sup>,P<sup>1</sup>.

<sup>\*5</sup>bu'i P<sup>1</sup>. <sup>\*6</sup>klu D<sup>2</sup>, G<sup>1</sup>,N<sup>1</sup>,P<sup>1</sup>. <sup>\*7</sup>gzhon P<sup>1</sup>. <sup>\*8</sup>brnyan D<sup>2</sup>. <sup>\*9</sup>// om. G<sup>2</sup>,N<sup>2</sup>,P<sup>2</sup>.

それら二 [種類の菩提心 (誓願心と発趣心)] は、さらに、二十二種類に区別される。それ (菩提心に関する二十二種類の区別) は、また、聖マイトレーヤが [『現觀莊嚴論』<sup>(34)</sup>において]、

そして、それ (菩提心) は、地、金、月、火、倉庫、宝石の鉞脈、海、金剛、山、藥草、友人、如意珠、太陽、歌、王、藏、大道、乗物、泉の水、歡喜の言葉、河川、雲 [、以上の比喩] によって二十二種類である。

と説かれている。<sup>(35)</sup>

(未完)



—— 略号一覧 ——

【一次文献】

- AA** Abhisamayālamkāra (Maitreya). See AAĀ.
- AAĀ** Abhisamayālamkāraḥloka (Haribhadra). *Abhisamayālamkāraḥloka Prajñāpāramitāvyaḥkyā (Commentary on Aṣṭasāhasrikāprajñāpāramitā) by Haribhadra. Together with the Text Commented on.* Ed. Unrai Wogihara. Tokyo: The Toyobunko, 1932–1935.  
= D No. 3791; P No. 5189.
- AAKŚV** Abhisamayālamkāra-kārikāśāstravṛtti (Haribhadra). *A Study on the Abhisamaya-Ālamkāra-Kārikā-Śāstra-Vṛtti.* Ed. Hirofusa Amano. Japan Science Press, 1975 (revised ed. Yamaguchi: Rokoku Bunko, 2008).
- AAV** Abhisamayālamkāravṛtti (Āryavimuktisena). *L'Abhisamayālamkāravṛtti di Ārya-Vimuktisena: Primo Abhisamaya. Testo e note critiche.* Ed. Corrado Pensa. Serie Proentrale Roma XXXVII. Roma: Istituto Itali- ano per il Medio ed Estremo Oriente, 1967.
- BhKr-I** Bhāvanākrama-I (Kamalaśīla). *Minor Buddhist Texts, Part II, First Bhāvanākrama of Kamalaśīla, Sanskrit and Tibetan Texts with Introduction and English Summary.* Ed. Giuseppe Tucci. Serie Orientale Roma IX, 2. Roma: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente, 1958.  
= D No. 3915; P No. 5310.
- BhKr-II** \*Bhāvanākrama-II (Kamalaśīla). *The Tibetan Text of the Second Bhāvanākrama.* Ed. Kiyotaka Goshima. Kyoto, 1983.  
= D No. 3916; P No. 5311.
- BhKr-III** Bhāvanākrama-III (Kamalaśīla). *Minor Buddhist Texts, Part III, Third Bhāvanākrama.* Ed. Giuseppe Tucci. Serie Orientale Roma XLIII.

Roma: Istituto Italiano per Medio ed Estremo Oriente, 1971.

- BPP** \*Bodhipathapradīpa (Dīpaṃkaraśrījñāna). D No. 3947; P No. 5443.
- BMDP** \*Bodhimārgadīpapañjikā (Dīpaṃkaraśrījñāna). D No. 3948; P No. 5344.
- GV(V)** Gaṇḍavyūhasūtra. *Gaṇḍavyūhasūtra*. Ed. P. L. Vaidya. Buddhist Sanskrit Texts No. 5. Darbhanga: The Mithila Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning, 2002.
- GV(S)** Gaṇḍavyūhasūtra. *The Gaṇḍavyūha Sūtra*. Critically edited. Ed. Daisetz Teitaro Suzuki and Hokei Idzumi. Tokyo: The Society for the Publication of Sacred Books of the World, 1949.
- MA** \*Madhyamakālaṃkāra (Śāntarakṣita). *Madhyamakālaṃkāra of Śāntarakṣita with his own commentary or Vṛtti and with the subcommentary or Pañjikā of Kamalaśīla*. Ed. Masamichi Ichigo. Kyoto: Buneido, 1985.
- MAP** \*Madhyamakālaṃkārapañjikā (Kamalaśīla). See MA.
- MAV** \*Madhyamakālaṃkāravṛtti (Śāntarakṣita). See MA.
- MAvBh** \*Madhyamakāvatarabhāṣya (Candrakīrti). D No. 3862; P No. 5263.
- MSA** Mahāyasūtrālaṃkāra (Maitreya). *Mahāyāna-Sūtrālaṃkāra: Exposé de la Doctrine du Grand Véhicule: Tome I Texte*. Ed. Sylvain Lévi. Paris: Librairie Honoré Champion, Éditeur, 1907 (repr. Kyoto: Rinsen Book Co., 1983).
- MSABh** Mahāyasūtrālaṃkārabhāṣya (Vasubandhu). See MSA.
- PVSPrP** Pañcaviṃśatisāhasrikā prajñāpāramitā. *Pañcaviṃśatisāhasrikā prajñāpāramitā I-1*. Ed. Takayasu Kimura. Tokyo: Sankibo Busshorin

Publishing Co., Ltd., 2007.

**PYBhKr** \*Pāramitāyānabhāvanākramopadeśa (\*Jñānakīrti, Ye shes grags pa). 詳細は、本稿 p.7 を参照。

**ŚS** Śikṣāsamuccaya (Śāntideva). *Śikṣāsamuccaya, A Compendium of Buddhist Teaching, Compiled by Śāntideva, Chiefly from Earlier Mahāyāna-sūtras*. Ed. Cecil Bendall. Osnabrück: Biblio Verlag, 1970 (Neudruck der Ausgabe 1897–1902).

**TAĀ** \*Tattvāvatārākhyaśakarasugatavācasamṣkṣiptavyākhyāprakaraṇa (\*Jñānakīrti, Ye shes grags pa). D No. 3709; P No. 4532.

## 【二次文献】

Hasebe, Koichi (長谷部好一)

[1971] 「吐蕃仏教と禅——頓悟大乘正理決をめぐる——」。『愛知学院大学文学部紀要』第1号。

Hyodo, Kazuo (兵藤一夫)

[2000] 『般若経釈 現観莊嚴論の研究』。京都：文栄堂書店。

Ichigo, Masamichi (一郷正道)

[2011] 『瑜伽行中観派の修道論の解明——『修習次第』の研究——』。2008年度–2010年度科学研究費補助金基盤研究(C)成果報告書。

Isoda, Hirofumi (磯田熙文)

[1979] 「波羅蜜理趣の実践論」。『東北印度学宗教学会 論集』第6号。

Iwata, Takashi (岩田孝)

[2012] 「サハジャヴァジュラの波羅蜜理趣での修習論——『真実十

偈釈』(Tattvadaśakaṭīkā) 和訳研究 (ad Tattvadaśaka 5d-6) —」。『伊藤瑞叡博士古稀記念論文集 法華仏教と関係諸文化の研究』。東京：山喜房仏書林。

Mimaki, Katsumi (御牧克己)

[1982] 「VI 頓悟と漸悟——カマラシーラの『修習次第』」。『講座大乘仏教 7 中観思想』。東京：春秋社。

Mochizuki, Kaie (望月海慧)

[2015] 『全訳 アティシヤ 菩提道灯論』。千葉：起心書房。

Ruegg, David Seyfort

[1981] *The Literature of the Madhyamaka School of Philosophy in India. A History of Indian Literature Vol. 7. Buddhist and Jaina Literature Fasc. 1.* Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

Sato, Akira (佐藤晃)

[2012] 「カマラシーラ以降の修行論における菩提心の定義に関する一考察——特に発趣心 (prasthānacitta) の定義をめぐって——」。『久遠研究論文集』第3輯。

[2013] 「観 (vipaśyanā) における無自性性論証の意義に関する一考察——特に無分別知の生起、断惑との関係性について——」。『仏教学』第55号。

Sparham, Gareth

[2006] *Abhisamayālaṅkāra with Vṛtti and Āloka. Vṛtti by Ārya Vimuktisena. Āloka by Haribhadra. Volume One: First Abhisamaya.* Fremont, California: Jain publishing company.

Tagami, Taishu (田上太秀)

[1990] 『菩提心の研究』。東京：東京書籍。

Taniguchi, Fujio (谷口富士夫)

[1992] "Quotations from the First Bhāvanākrama of Kamalaśīla Found in Some Indian Texts." *Tibetan Studies: proceedings of the 5<sup>th</sup> seminar of the International Association for Tibetan Studies*. Ed. Ihara Shoren and Yamaguchi Zuiho. Narita: Naritasan Shinshoji.

Tshul khrim sKal bzang : Fujinaka, Takashi (ツルティム・ケサン, 藤仲孝司)

[2005] 『チベット仏教の原典『菩提道次第論』 悟りへの階梯』。京都：UNIO。

Uryuzu, Ryushin : Nakazawa, Ataru (瓜生津隆真, 中沢中)

[2012] 『全訳 チャンドラキールティ 入中論』。千葉：起心書房。

---

(1) カマラシーラの入蔵年については、研究者により見解が異なり、未だ確定されていない。カマラシーラに関して最も知られる事績は、一般に「サムイェーの宗論」と称されるサムイェー僧院における中国人禅僧・摩訶衍との教義論争であろうが、この論争はいつ行われたか、という点が一つの参考となろう。この論争の年代については種々の見解が示されてきたが、主なものとして以下の諸説を挙げることができる。ポール・ドミエーヴィルは、敦煌で発見された漢文資料『頓悟大乘正理決』の記述に基づき、上記論争は 792 年から 794 年の間に行われたとする。ジュゼッペ・トゥッチは、ドミエーヴィル説を修正し、792 年から 794 年の直後だとする。上山大峻は 780 年から 782 年という説を示し、一方で山口瑞鳳は上山説を訂正し、794 年から 795 年という説を提示した。以上長谷部[1971] を参照。

(2) 歴史家パオ・ツクラクテンワ (dPa' bo gTsug lag phreng ba, 1504–1566) は、サムイェー僧院の縁起録『バシエ』に基づき『学者の宴』を著し、その中で三篇の BhKr の著述背景に関する記事を残す。御牧[1982] 218–219 参照。

(3) BhKr の概要については、Ruegg [1981] 96–99、一郷[2011] ix–xvii を参照。

(4) この点についてはカマラシーラの Bhkr-I (BhKr-I 210,7-218,6) のみならず、シャーンタラクシタの\**Madhyamakālaṃkāravṛtti* (MAV) 及びそれに対するカマラシーラの註釈書 (\**Madhyamakālaṃkārapañjikā* (MAP)) にも確認される (MA 296-301)。

(5) BhKr-I と PYBhKrU の対応関係については、Taniguchi[1992]及び佐藤[2012] 97f.を参照。なお、本稿では扱い得なかった「§3.1.2. 三種類の誓願心と十九種類の発趣心」以降で展開される菩提心の分類方法に関しては、*Abhisamayālaṃkāra* 系の論師（特にハリバドラ以降）の影響が窺われる。

(6) ジュニャーナキールティの年代については、佐藤[2012] 注 16 を参照。

(7) なお、筆者は 2014 年度に早稲田大学に提出した博士学位請求論文の中でもその一部を扱っているが、本稿ではその一部に加筆修正を施したものと未だ扱っていない部分とを扱う。

(8) 管見の限り、PYBhKrU に言及する先行研究は以下の通りである。磯田[1979], Taniguchi[1992], 岩田[2012], 佐藤[2012]を参照。

(9) 現在正確なサンスクリットタイトルは不明である。便宜的にデルゲ版目録の還梵タイトルを挙げる。北京版の目録では、*Tattvāvatārākyasakarasugatavacastātparyavyākhyāprakaraṇa* と還梵される。なおデルゲ版、北京版の両者が伝えるチベット語訳タイトルは同じである。

(10) TAĀ D 59a5-66b1; P 65b4-73b7 がその該当箇所である。その殆どの部分が PYBhKrU の文言と一致する。しかし、PYBhKrU の「§3.1.2. 観」に相当する TAĀ の該当箇所 (D 62b2 以下; P 69a7 以下) は、PYBhKrU に比して詳細な議論を行っている。

(11) BMDP のタイトルについては、望月[2015] 16 を参照。

(12) *Lam rim chung ba* におけるジュニャーナキールティに関する言及については、ツルティム・藤仲[2005]を参照。

(13) 本稿では、本稿で校訂テキスト及び試訳を提示しない PYBhKrU の本文に言及する際、またそのテキストを提示する際、紙幅の都合上、D<sup>1</sup> を底本とし、原則的に P<sup>1</sup> との異読情報を示すに留める。ただし、それら以外の版に異読がありそれを採用する場合はその限りではない。

(14) Cf. PYBhKrU D<sup>1</sup> 76b5f.: shes rab ni thabs de nyid phyin ci ma log par yongs su gcod pa'i rgyu'o // ( [一方、] 智慧は、まさにその方便が顛倒の無いものであると決定する原因である ) . Cf. BhKr-I 194,20f.: prajñā tu<sup>(\*)</sup> tasyaivopāyasyā- viparītasvabhāvaparicchedaheṭuḥ<sup>(\*)</sup> (= D 25b7; P 26b2f.: shes

rab ni thabs de'i ngo bo nyid phyin ci ma log par rtogs pa'i rgyu yin te /) (<sup>\*1</sup>...<sup>\*1</sup>)  
<sup>0</sup>eva<sup>0</sup> om. Tib.; rtogs pa Tib. for<sup>0</sup> pari- ccheda<sup>0</sup>).

(15) Cf. PYBhKrU D<sup>1</sup> 76b5–7f.; BhKr-I 194,20–195,2; BhKr-II 69,16–20.

(16) Cf. PYBhKrU D<sup>1</sup> 76a7–76b3.

(17) Cf. TAĀ D 59a5; P65b4: gang zhig bsgom stobs yongs su rdzogs //.

(18) Cf. TAĀ D 59a5f.; P 65b4f.

(19) Cf. TAĀ D 59a6; 65b5: bsod nams dang ye shes kyi tshogs gnyis ...

(20) BhKr-I, BhKr-II, BhKr-III でも、一様に、止観双運道を成就し、出定したヨーガ行者が普賢行願 (bhadracaryāpraṇidhāna) を起こすべきことを説く。Cf. BhKr-I 221,1–3: tataḥ sarvabuddhabodhisattvebhyaḥ pūjāstotropahāraṃ kṛtvā, āryabhadracaryāpraṇidhānam abhinirharet (= D 38a2f.; P 40b6f.: de nas sangs rgyas dang byang chub sems dpa' thams cad la mchod pa dang bstod pa gsol te / 'phags pa bzang po spyod pa la sogs pa'i smon lam chen po gdab po //) (それから (= 有情達に対して大悲を起こし、彼らに一切法の無自性性を理解させようと熟考してから)、あらゆる仏・菩薩のために供物と讃歎とを供養し、『聖普賢行』という誓願を引き出すべきである); BhKr-II 55,20–23; BhKr-III 13,10–13. ディーパンカラシュリージュニャーナ (Dīpaṃkaraśrījñāna, 982– 1054) のBMDPの記述も参考となる。Cf. BMDP D 243a7–243b3; P 280a5–280 b1. 翻訳は望月[2015] 45,2–11 を参照。

(21) Cf. BhKr-I 187,18–188,1: ato 'tiduṣkare pravartamāno na cireṇaiva<sup>\*1</sup> saṃbhārān paripūryāvaśyam eva<sup>\*2</sup> sarvajñapadam adhigacchati (= D 22b4; P 22b8f.: de ltar shin tu bya dka' ba la zhugs nas ring por (D; po P) mi thogs par tshogs yongs su rdzogs te gdon mi za bar thams cad mkhyen pa'i go 'phang thob par 'gyur ro //) (<sup>\*1</sup>eva om. Tib. <sup>\*2</sup>eva om. Tib.) (したがって、著しく困難な [努力] に対して邁進している [菩薩] は<sup>\*1</sup>, 決して長い時間を掛けること無く、諸資糧を満たし、必ずや一切智者の地位へと到達する (<sup>\*1</sup>BhKr-I 187,14–16: tathā hi tayā preryamānā bodhisattvāḥ ... atiduṣkāradīrghakālike 'pi saṃbhāropārjanaparīśrame pravartante)).

(22) 本稿注 12 を参照。

(23) Cf. PYBhKrU D<sup>1</sup> 76a7–76b2. 同様の見解は、BhKr-I にも確認される。佐藤[2013] 96 以下を参照。

(24) ここでの「菩提心」という補いについては、本稿校訂テキスト D<sup>1</sup> 73a2

以下を参照。清浄なる菩提心を発すことが目指されるという発想は、PYBhKrU において見られる修行道全体を二十二段階の菩提心修習の中に収めるという発想に基づいている。佐藤[2012] 102 以下を参照。つまり、第二十二番目の菩提心は、法身と結びついた菩提心とされ、それが発った行位は仏地とされる。つまり、ここで言われる清浄なる菩提心とは一連の修行を経て、仏地に至った修行者に発る菩提心を指すと言える。

(25) Cf. TAĀ D 65b5–66a1; P 59a6–59b2.

(26) 苦の観察については、BhKr-I の以下の箇所を参照。See BhKr-I 188,5–190,12. BhKr-I では大悲が成就することに基づき、菩提を希求する心（菩提心、特に誓願心）が努力すること無く任運に生起すると説く。See BhKr-I 190,14–16. その大悲を成就するために苦の観察が用いられる。苦の観察は、まず親近者の苦を観察することから始まり、遂には敵対者に対しても平等に観察するに至る。これにより、あらゆる有情に対する悲が平等に成就され、大悲の成就へと至る。

(27) Cf. BhKr-I 190,14–16: tasyaivam<sup>\*1</sup> kṛpābhyāsabalāt sakalasattvābhyuddharaṇapratijñāyānuttarasamyakṣaṇbodhiprārthanākāram ayatnata eva bodhicittam utpadyate (= D 24a2-3; P 24b1-2: de ltar snying rje goms pa'i stobs kyis sems can ma lus pa drang bar dam bcas na bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub tu smon pa'i rang bzhin gyis byang chub kyi sems sgrim mi dgos pa kho nar skye ste /) (<sup>\*1</sup>tasya° om. Tib.) (彼（＝菩薩）には、以上のように慈悲（kṛpā）を繰り返し〔修習すること〕に基づいて、あらゆる有情を救済すると誓うことにより、無上なる正しい等覚に対する希求を在り方とした菩提心が、まさに努力すること無く生起するのである)。

(28) Cf. TAĀ D 59b2–4; P 66a1–4.

(29) Cf. *Abhisamayālamkāra* (AA) I.18ab (= AA 4,1): cittotpādaḥ parārthāya samyakṣaṇbodhikāmata (発心とは、他者のために正しい悟りを求めることである)。ディーパンカラシュリージュニャーナのBMDPにも引用される。See D 257b 6f.; P 297a6. 翻訳は望月[2015] 78,6–9を参照。BMDPでは菩提心一般の解説に対してではなく、誓願心（\*prañidhicitta）と発趣心（\*prasthānacitta）という二種類の菩提心のうちの前者誓願心を解説する際に引用される。



(30) Cf. TAĀ D 59b4f.; P 66a4f.

(31) Cf. BhKr-I 192,17–19: tac ca bodhicittam dvidvidham praṇidhicittam prasthānacittam ca (= D 25a2; P 25b3: byang chub kyi sems de yang rnam pa gnyis te / smon pa'i sems dang /<sup>1</sup> zhugs pa'i sems te / (<sup>1</sup>/ om. P)) (そして、その菩提心とは二種類である。[すなわち] 誓願心と発趣心とである)。菩提心を誓願心と発趣心に分類する発想は、既にシャーンティデーヴァの *Śikṣāsamuccaya* (ŚS) に見られる。Cf. ŚS 8,15f. PYBhKrU では、菩提心を二種類に分類した上で、それらをさらに二十二種類に分類する。この分類方法は AA 系統のそれを採用したものである。しかし、PYBhKrU で見られるような分類方法は AA それ自体には確認されない。すなわち、AA では発心 (cittotpāda) を二十二種類に分類する方法のみが確認され、誓願心と発趣心の二種類に分類する方法は見られない。この二通りの分類方法 (二種類と二十二種類) は、AA の註釈書において確認される。今は、ハリパドラの *Abhisamayālaṅkāraloka* (AAĀ) を確認しておく。Cf. AAĀ16,18–20: tatra samyaksambodhim adhigantukāmenādau śūnyatākaruṅāgarbham bodhicittam praṇidhiprasthānasvabhāvaṃ dvidvidham utpādyā ... (その場合、正しい悟りを証得したいと望む者によって、先ず、空性と慈悲とを胎とし、誓願と発趣を自性とする、二種類の菩提心 (誓願心と発趣心) が生ぜしめられ、……)。また PYBhKrU よりも後の BMDP でも、先の ŚS を引用し、二種類に分類する方法を採用している。本稿注 25 参照。

(32) Cf. GV(V) 395,24f. この GV が引用される論書については一郷[2011] 12, 注 61 を参照。

(33) Cf. TAĀ D 59b5–7; P 66a5–7.

(34) Cf. AA I.19–20 (= AAĀ 27,4–7): bhūhemacandrajvalanair\*<sup>1</sup> nidhiratnākarār-  
navaiḥ / vajrācalānūṣadhimitraiś cintāmaṇyarkagītibhiḥ\*<sup>2</sup> //  
nrpagañjamahāmārgayā-  
naprasavaṇodakaiḥ / ānandoktinādimeghair dvāviṃṣatividhaḥ sa ca // (= D 2b5f.;  
P 3a4f.: de yang sa gser zla ba me // gter dang rin chen 'byung gnas mtsho // rdo  
rje ri sman bshes gnyen dang // yid bzhin nor bu nyi ma glu // rgyal po mdzod  
dang lam po che // (\*<sup>1</sup>bzhon ba bkod ma'i chu dang ni // sgra brnyan chu po sprin  
rnams kyis // rnam pa nyi shu rtsa\*<sup>1</sup>) gnyis so // (\*<sup>1</sup>...<sup>1</sup>)om. P)) (\*<sup>1</sup>oanda° AAKŚV  
11,12. \*<sup>2</sup>vajrācalāuṣadhair mitracintāmaṇy° AAKŚV 11,13; vajrācalāuṣadhimitraiś

cintāmaṇyarkagītibhiḥ AAV 16,17) (そして、それ(発心 cittotpāda)は、大地、金、月、火、倉庫、宝石の鉱脈、海、金剛、山、薬草、友人、如意珠、太陽、歌、王、蔵、大道、乗物、泉の水、歓喜の言葉、河川、雲 [、以上の比喩] によって二十二種類である)。BMDP は PYBhKrU と同様にこの AA の偈文に基づいて菩提心を二十二種類とする。Cf. BMDP D 258a2f.; P 297a8–297b2. その BMDP では、その当時、二十二種類の菩提心をさらにどのような枠組みで整理するかという点に関して複数の見解があったことが確認される。Cf. BMDP D 258a3–5; P 297b 2–4: de la gnyis ni rgyu'i byang chub kyi sems so // bcu bdun ni lam gyi byang chub kyi sems so // gsum ni 'bras bu'i byang chub kyi sems so // gnyis ni smon pa'i sems so // nyi shu ni 'jug pa'i sems so // rnam grangs gzhan yang<sup>\*1</sup> gsum ni rgyu'i dus kyi sems so // bcu drug ni lam gyi dus kyi sems so // tha ma gsum ni 'bras bu'i dus kyi sems so // de dag gi don rgyas pa ni mngon par rtogs pa'i rgyan de nyid du blta bar bya'o // (\*<sup>1</sup>yang / P) (それらのうち、[最初の] 二 [種類] は原因の菩提心である。[続く] 十七 [種類] は過程の菩提心である。[残りの] 三 [種類] は結果の菩提心である。[また最初の] 二 [種類] は誓願心である。[残りの] 二十 [種類] は発趣心である。また、他の類別では、[最初の] 三 [種類] は原因の時の心である。[続く] 十六 [種類] は過程の時の心である。最後の三 [種類] は結果の時の心である。それらの詳しい意味はその『現観莊嚴論』自体を見るべきである)。翻訳は望月[2015] 78,16–79,6を参照。BMDP によれば、二十二種類の菩提心を整理する枠組みに二通りあることが分かる。第一の枠組みでは、二十二種類の菩提心のうち、まず、最初の二種類は誓願心であり原因の菩提心とされる。そして、残りの二十種類は発趣心とされ、そのうち最初の十七種類は過程の菩提心、残りの三種類は結果の菩提心とされる。第二の枠組みでは、二十二種類のうち、最初の三種類は原因の時の菩提心とされ、次の十六種類は過程の菩提心で、残りの三種類は結果の菩提心とされる。これら二通りの枠組みは、原因の菩提心を二種類にするか、あるいは、三種類にするかで理解が異なっている。なお、PYBhKrU における菩提心の枠組みは、最初の三種類を誓願心としてまとめるが、この点に関しては BMDP で示される後者の見解と共通する。発菩提心に関して二十二種類の比喩を挙げる発想は、既に Mahāyānasūtrālaṃkāra (MSA) IV.15–20 に確認される。そして、MSA はその典拠として Akṣayamatisūtra (『無尽意経』)を挙げる。兵藤[2000] 102,注(3)を参照。ヴァスバンドゥ

( Vasubandhu, ca. 400–480) は MSA IV.15–20 に対する註釈 *Mahāyānasūtrālamkārahāṣya* で各発心に関して解説している。AA に対する註釈者ら (アールヤヴィムクティセーナ (Āryavimuktisena, ca. 6<sup>th</sup>) やハリバドラ) による発心に関する解説には、ヴァスバンドウの解説との共通点、及び、相違点が確認される。Cf. 田上[1990] 165,13–178,9. 本文中、「マイトレーヤが……と説かれている」とあることから、MSA が典拠である可能性もあるが、この箇所が続く菩提心の解説内容によると、AA の注釈者達の解説と通じる点が多い。このことからジュニャーナキールティは、直接的には AA を典拠としていると考える。佐藤[2012]参照。

(35) Cf. TAĀ D 59b7–60a1; P 66a7–66b1.